

CISMOR リサーチフェロー研究会（啓典解釈研究セミナー）
「クルアーンの理解と解釈：古典期ウラマーの実践を中心に」

日時：2022年10月30日（日）、10時30分～13時（日本時間）

会場：オンライン（Zoomプラットフォーム）

企画・司会：兼定愛（同志社大学一神教学際研究センター特別研究員）

プログラム

- 10:30-10:35 センター長挨拶 アダ・タガー・コヘン教授（CISMORセンター長）
趣旨説明 兼定愛
- 10:35-11:35 「クルアーンにおける「天の書」関連句をめぐる解釈の展開」
大川玲子（明治学院大学国際学部 教授）
- 11:40-12:40 「クルアーン読誦学とアラビア語正書法の展開：ラスム学の5原理とその主要
著作」
竹田敏之（立命館大学 立命館アジア・日本研究機構 准教授）
- 12:40-13:00 全体に関する質疑応答、参加者全員で自由討論（20分）
- 13:00 閉会の挨拶

（講師）大川玲子（明治学院大学国際学部 教授）

竹田敏之（立命館大学 立命館アジア・日本研究機構 准教授）

（企画）兼定愛（同志社大学一神教学際研究センター特別研究員）

（主催）同志社大学 一神教学際研究センター

講演要旨

「クルアーンにおける「天の書」関連句をめぐる解釈の展開」

大川玲子（明治学院大学国際学部 教授）

本講演は基本的に、拙著『イスラームにおける運命と啓示 クルアーン解釈書に見られる「天の書」概念をめぐる』（晃洋書房、2009年）の解題（一部）となる。ただ研究手法などについて刊行後の振り返りも行いたい。

伝統的にイスラームの信仰では「天の書」が存在することが認められてきた。「天の書」とは、全被造物の運命が予め書かれる「運命の書」とクルアーンという言葉が元々書かれている「啓示の書」としての役割をもつとされる。この「天の書」の存在はクルアーンのいくつかの句が根拠とされるが、これらの句は曖昧で解釈の幅も大きい。

上記の拙著はクルアーン約20の句を対象として、タバリー（923年没）からアブドゥ（1905年没）、マウドゥーディー（1979年没）といった9人の解釈者によるクルアーン解釈書（タフスィール）の展開をたどり、その意味を検討したものである。本講演ではそれらの句のうちのいくつかに焦点をあて、紹介していきたい。

「クルアーン読誦学とアラビア語正書法の展開：ラスム学の5原理とその主要著作」

竹田敏之（立命館大学立命館アジア・日本研究機構 准教授）

ラスム学とは、クルアーンにおけるアラビア語正書法と読誦にかかわる母音記号などの諸記号を扱う学問である。この分野は、東方アラブ世界で7～8世紀に考案された丸点による母音記号のドゥアリー方式と、「シャクル」の名で知られるハリール方式を基礎としつつ、11～12世紀を中心にマグリブやアンダルスの学者によって学問の体系化が進められた。

本発表では、ラスム学の骨子となる5原理（省略、追加、交替、ハムザ、分かち書き）を整理し、その主要著作を紹介しながらラスム学の史的展開を跡付ける。具体的には、アンダルス出身の読誦学者アブー・アムル・ダーニー（1052年没）、弟子のイブン・ナジャーフ（1103年没）、またフェズで活躍したラスム学者のハッラーズ（1318年没）などを扱う。またサウディアラビアの王立印刷所が刊行するマディーナ版ムスハフ〔クルアーンの刊本〕（1985年～）を対象に、ラスム学の伝統的規範がどのように反映されているかを検証する。

以上